



MEISEI UNIVERSITY

2024.Oct

Vol. 34

特集
“1年生を
迎えて”

JiN-SHA YELL

ジンシャ
エール

明星大学 人文学部人間社会学科
ニュースレター

DEPARTMENT OF SOCIOLOGY AND HUMAN WELFARE

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わる
すべての人にエール(声援)を送ります!



企画・運営してくださった上級生



人間社会学科学生交流会

今年も人間社会学科1年生の学科交流会が2回にわたり開催されました。この交流会は、コロナ禍で入学した新入生を応援するために、有志の上級生が発案し、現在も自主的に企画・運営されています。

交流会では、初対面の新入生同士が笑顔で交流する様子や、上級生が親身になって新入生の相談に乗る様子が見られました。新入生たちは、楽しみながら新生活について学び、同級生や先輩たちと新しいつながりを築いていったようです。

参加した新入生からは、以下のような感想が寄せられています。「ゼミの仲間と初めて対面しましたが、しっかり楽しめ、仲も深まりました。改めて人文学部人間社会学科を選んで良かったと思いました」「上級生

さんが優しく接してくださり嬉しかったです」「楽しい企画をありがとうございました。班のメンバーと協力することを通じて仲良くなれました」「作業を通じてコミュニケーションを図り、役割分担をしながら進めたことで、良い結果が得られました」「試行錯誤しながら協力して1つのことに取り組めて楽しかった。グループワークの楽しさも学べたので、これからも経験したいです」「後期のフィールドワークが楽しみになってきました」という声が聞こえてきました。

新入生のみなさん、どうか充実した大学生活をお送りください。そして企画・運営してくださった優しい上級生のみなさん、本当にありがとうございました。
(荒井 悠介)

入学後の1年生の感想

大学入学後の生活はまさに「剛毅果断」です。私は様々な分野に興味を持ち、幅広く学びたいという思いから人間社会学科に入学しました。学科では、社会で起こる全ての出来事が学びの対象となります。皆さん信じられますか!こんなにも胸が躍る(面白い)学問はなかなかありません。

私が大学に入ってから一番強く感じたことはこれまでの「時間の流れ」の違いです。小中高までとは違い、個々が好きに使える時間が圧倒的に多くなります。

そんな中、私は教職課程、サークル、そして大学祭の実行委員会企画部の活動に積極的に参加しています。特に印象強い出来事は、大学祭実行委員会で私が提案した企画が採用されたことです。大学祭にお越

しの際はぜひ楽しんで欲しいです。

これらの活動を通じて、学部学科の枠を超えて様々な人と関わることができており、非常に充実した大学生活を送っています。大学は年齢の制限がなく、多種多様な人がいるため、幅広い交流から視野が広がり、日々成長を実感できています。

私の座右の銘は高杉晋作の「面白きこともなき世を面白く」です。この言葉には、自分の心構え次第で、どんな状況でも楽しさを見出せるという意味があります。皆さんもぜひ、自分自身の力で新しい挑戦をして欲しいと思います。そのくらい、充実した大学生活を送っています。
溝口 愛苑(1年)

2024年7月10日、日頃の学びの成果を活かして、 学生がワークショップ型の出前授業を明星高校でおこないました。

「献血」という人助け

献血の重要性とその意義を伝えることを目的としました。

授業ではまず、献血の基本的な知識や必要性について説明し、献血によって提供された血液がガンや白血病などの治療に欠かせないものであること、そして人工的に作ることができず、長期間保存もできないことから常に献血への協力が必要だと伝えました。



献血って何？
高校生に語る松尾さん

高校生のアイディアに耳を傾けて

寺田ゼミ

松尾基央さん



次に、友寄蓮さんと山口雄也さんの動画を視聴し、血液製剤を必要とする人々の体験を通じて、献血の重要性を実感しました。

また、高校生たちと「どうすれば献血に行きたくなくなるか」「献血に対するイメージ」について話し合い、「痛そう」「針が怖い」といった意見を話し合い、改善策を考えました。

日本では毎日約14,000人分の献血が必要であり、献血や骨髄バンクによって多くの人の命が救われており、今も助けを求めている人がいます。この授業が、高校生にとって献血を「自分にもできる人助け」として考えるきっかけになればと思っています。



竹峰ゼミ

下田彩水さん

太平洋の島からみつめる環境問題

私達が実際にマーシャル諸島に行き、見て感じたこと（次頁参照）を通して、これから環境問題にどう向き合っていくのか話し合いました。

前半では、タブレットを使ってもらい調べ学習形式でマーシャル諸島の概要や歴史的背景・文化について理解を深めました。後半では、高校生のイメージする環境問題とはなにか意見交換してもらった上で、マーシャル諸島が抱える核や気候変動の問題を紹介しました。

「環境」問題といっても地域や人によって捉え方が異なること、そもそも社会学で環境問題を考えるとはどういうことなのかをまとめて話しました。高校生が環境問題に関心を持ち、向き合うヒントになってくれたらうれしいです。



授業を終えて
高校生から拍手をもらう下田さん

ジェンダーのレンズを持って社会を見つめよう

「女性専用車両の導入に賛成or反対？」をテーマにディベートを行いました。

賛成派と反対派を分け、かつ根拠に基づいた主張や反論のみ可能というルールにしたことで、資料の探し方や自らの主張をどう展開するのか活発に意見が交わされていました。参加した生徒から「当たり前にある女性専用車両について反対の立場で調べてみて、大切さなどを改めて考えた」との感想をもらいました。

普段何気なく使っているものに疑問をもち、調べ考える経験を提供することができました。

竹峰ゼミ

松永優佳さん



高校生に語りかける松永さん

Marshall Islands

マーシャル諸島

海の向こう側からわたしをみつめて

ホームステイ先の目の前の海



日本の真冬から一転、灼熱の太陽、強い海風、透き通ったラグーン。まさか、初の海外がマーシャル諸島だとは思いませんでした。2024年2月から3月にかけて約3週間、ゼミの有志と他大の学生も交えて、首都マジュロとともに、さらに小さな飛行機に1時間乗り、地方のアイルックにも足を延ばしました。

ココナッツ、車内に弾むミュージック、ウクレレを弾く子どもたち、アミモノ(手工芸品)を編む90歳のクレイドルさん、怖い野良犬に優しい猫。マーシャル語の挨拶「ヤッコエ」を覚え、言葉がうまく通じなくても、子どもたちと歌や手遊びを通じて仲良くなり、「島のお母さん」にアミモノの作り方を教えてもらいました。ホームステイ先では、少ない雨水タンクで食事やトイレを利用したり、パンノキの実やウミガメなどを初めて食べました。奇想天外なこともありながらも、たくさんの新しい出会いに恵まれ、心地よい生活を送ることができました。

子どもからウクレレを習う



現地の人と関わるなかで、「島のことを知らない、わからない」とは言えなくなりました。アメリカの統治下で67回の核実験が行われ、今も放射能被害をかかえ、自分たちの島に戻れない人たちの歌を聞きました。マーシャル諸島は第一次世界大戦の時から日本の植民地にもされ、太平洋戦争では戦場とされた事にも目を背けられなくなりました。現在、海面上昇で島が浸水し、沈んでしまうことを詩や絵などで訴えている姿を目にし、「先進国」とされる日本で暮らすわたしの立場を考えさせられました。

「歴史の上に私たちは立っている」と大学1年の授業で聞いたことを思い出しました。聞いた時は少し理不尽に思ったけれど、過去と現在は切り離すことはできないことを、肌で感じ取ることができました。日本に住む私がどう生きていくのか、海の向こう側の人のことにも想像力を広げられるようになりました。

竹峰ゼミ

藤原日向さん



アイルックで島の方に話をうかがう「モシモシ カメヨ……」の歌を知っていた

沖縄で考えた「基地」と「平和」

私は沖縄をテーマにした卒業論文に取り組んでいます。今回、熊本先生が沖縄国際大学で「沖縄にとって基地とは何か」をテーマとする集中講義を開講することになったので、参加させてもらいました。

講義では、同じ沖縄でも地域によって基地のイメージや関わり方が違うこと、若い世代の間に「どうせ基地はなくなる」という『あきらめ志向』が強まっていることなどを学びました。ディスカッションの機会もたくさんあり、生まれ育った環境の違う人たちが率直に意見を交換し、基地について考える貴重な時間となりました。

校舎の裏には普天間基地がある



Okinawa

沖縄

熊本ゼミ

大中はるひさん

特に印象に残っているのが、沖国大の学生が発言した「沖縄の問題を自分事として考えてほしいと県外の人に押し付けてしまうのは申し訳ない」という言葉です。日本全体で考えるべき安全保障問題を「基地問題＝沖縄」という構図に押し込めていることが問題だと考えていた私は、この言葉に驚くとともに、本土の人が簡単には介入できない問題だと改めて気づかされました。

でも、「平和で安全な暮らしを送りたい」という願いは、沖縄県民だけでなく日本全体の願いでもあるはず。その実現のために基地とどう向き合っていくのか、考え続けようと思った4日間になりました。



沖縄国際大学の正門

新任教員紹介

Introduction of New Faculty Member

今年度4月より助教として着任しました。

「変化する家族関係」を大きなテーマとして、特に親子関係が子どもの成長とともにどのように変化するのか、親の役割認識はどのように変わっていくのか、をインタビューやアンケートなどの手法で研究しています。

講義では主に家族社会学の分野と社会調査実習を担当しています。調査実習では、「大学生のライフコース選択についての調査」として、学生の興味関心に基づいたアンケート調査の作成・データ分析・報告書作成までを行います。

家族というテーマは、皆さんにとって身近で、「家族とはこういうもの」と表現することは簡単に思えるかもしれませんが。大学で社会学として「家族」を学ぶ意義は、今まで主観的に見ていたものに統計的データやグループワーク、様々な論文など、新しい社会的な視点を加え、物事を客観的に捉える力を身に付けることにもあると思います。

皆さんと色々な視点から議論することを楽しみにしています。どうぞよろしくお願い致します。

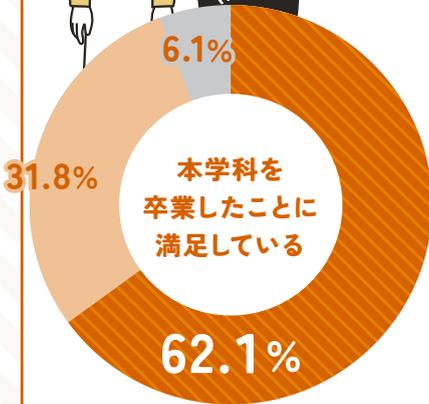


花形 美緒 はながた みお

宮城県仙台市出身。社会科学博士(お茶の水女子大学大学院)。専門は家族社会学。

SURVEY

2023年度卒業生アンケートから



卒業式の日に行ったアンケートで、「本学科を卒業したことに満足しているか」と尋ねたところ、62.1%から「非常に満足」、31.8%から「やや満足」との回答を得た。これらを足し合わせると93.9%となることから、9割以上の学生が本学科を卒業した事に満足していることがわかる。

「面倒見がよい学科だったと思うか」と尋ねたところ、「とてもそう思う」と答えた学生が59.1%、「ややそう思う」と答えた学生が24.2%であった。これらを合計すると83.3%。ここから、8割を超える学生が本学科を面倒見の良い学科だったと感じていることがわかる。なお、「教職員による学生サポートに満足しているか」と尋ねたところ、「非常に満足している」と答えた学生が53.0%、「やや満足している」と答えた学生は34.8%であり、合計した割合は8割を超えている。

また、「卒業後の進路の満足度」について尋ねたところ、「とても満足」と答えた学生が42.4%、「やや満足」と答えた学生が47.0%であった。これらを足し合わせるとほぼ9割の学生が就職後の進路に満足していることがわかる。

(天野 徹)

